

4. 杉野屋と子供

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4981

4. 杉野屋と子供

岩橋愛奈

- I. はじめに
- II. 子供を取り巻く地域社会のあり方の変化
- III. 杉野屋での子供を対象とした組織と活動
- IV. 考察

I. はじめに

大人たちは口をそろえたように「今の子供は元気がない。昔はもっと外で遊んでばかりいた」と言う。私が杉野屋で調査しているときにも同じようなことを聞いた。このときに彼らが使う「昔」とは、大人たちが現在から過去の自分の子供時代を思い出した「昔」である。一言で「昔」といってもその言葉の指す意味の幅は広く、固定したものではなく、人さまざまな使い方をしている。また「昔」という語を用いるのは一般に、曖昧な記憶を語る時だ。人は過去のことを語るときに出来事が起きた正確な年月日を記憶していることは少ない。過去を想像し、イメージすることで、新たに記憶が書き換えられた可能性すら存在する。だがこの曖昧な「昔」を語ることで、人は現在と過去とを比較する。記憶の正誤はどうであれ、大人が今の子供たちのことを語るときに、必ず過去の自分を投影している。過去の自分を見ることで、今の子供たちを見ているのだ。つまり今の子供たちをみる判断材料に、イメージされた自分の子供時代を用いている。

今回の調査では結果的に子供がいる親の世代や、孫がいる祖父母の世代に話を聞くことが多かったため、彼らの「昔」を通して、今の杉野屋の子供の置かれている状況を聞く結果となった。彼らの語る「昔」とは、1940年代から1950年代（祖父母の子供時代）、または1960年代から1970年代（親の子供時代）ということとなる。よって本稿は1940年代から今に至る間の、杉野屋における子供たちの置かれている状況や、子供を対象とした地域の組織活動、子供たちを取り巻く環境の変化と子供についての意識の変化を時代に沿ってみていく。だが、子供たちへの直接の聞き取りは困難であり、かつ私自身もう子供ではないので、ここで言う子供とは大人の目を通した子供であることを先に断っておくことにする。

杉野屋の地域社会の中で子供をみていくため、子供会などの地区組織や家庭での子供の様子

を記述している。またもう1つ子供たちの様子を見る際に学校生活を語ることは欠かせない。子供たちは生活の半分は学校で過ごすからである。またここで使う「子供」とは小学生を中心に幼児から中学生、あるいは高校生までを対象としている。しかし、そのような個々の年齢層だけでなく大人から見た「子供」一般という視点で捉えることにする。

II. 子供を取り巻く地域社会のあり方の変化

少子化が叫ばれている現在だが、杉野屋からの小学校入学児童数を調べてみると意外にもベビーブーム期（第1次ベビーブームは1950年代後半、第2次ベビーブームは1970年代末から1980年代初めに入学した児童）を除けば、戦後から今日までそれほど大きな減少はみられない。最も多い1978年には18人の児童が杉野屋から小学校へ入学している。だがその前年の77年には4人、76年には9人、75年には6人といずれも1桁台にとどまっている。これらの時期の入学者数は今よりもわずかに多いだけといえる。2003年度杉野屋からの小学校入学児童数が7人であることから分かるように、この数十年間における杉野屋の子供の数は根本的には大差ないのである。家庭レベルでの子供の数は確かに減ってきている。だが世帯数が増えた分、地域としての子供の数は比較的安定していると言う人もいた。子供が少ないと感じるのは単に数の問題ではない気がする。

1. 地域社会の生活

以前の有力地主の名が今も高齢者には記憶されているように、杉野屋では農業で生計を立てていた人が多かった。現在の子供の祖父母が子供であった時代は、彼らの親は農業を主に営んでいた。子供は学校から帰ってくると田んぼに行き仕事を手伝わされた。学齢期に達した子供は働き手であり、養子を取ったりするのも家を継がせて農業をさせるためであった。家を継いで農業をすることを子供自身当然のこととして受け止めていた。遊びも田んぼでドジョウを捕まえたり、石蹴り、お手玉、めんこなど、既製の遊び道具がないので、自分たちで作って遊んでいた。田んぼも校庭も山もお寺も家もお宮も、全てが遊び場だった。夏には海まで歩いて泳ぎに行ったり、堤で泳いだりしていた。子供たちだけで遊びを考え、叱られても懲りずに遊んでいた。

現在の子供の親の世代になると、農業以外の道に進む者も出てくる。だが彼らが子供のころはまだ長男は家を継ぐものという考えは定着しており、男の子は将来家の主となるように育てられていた。また子供自身もそのことを当然のように受け止めてはいたが、外への関心が無かつ

たわけではない。親からは家を継ぐものと期待され育ってきたが、今では田を持っている人も他の人に請け負ってもらったりと、彼らの親が期待していたものとは結果的には異なる道を歩むこととなった。しかし彼らの親の世代の考えが彼らにもある程度浸透していた。だがこの世代では子供時代に田んぼで遊んだという記憶を持つ人は少なくなる。夏は堤で遊ぶのは危ないということで、彼らの親たちが手作りのプールを作ってくれた。川をせき止めて作ったプールは粗末ではあったが、彼らの絶好の遊び場であった。

現在の子供たちは田んぼにはいったことが無い子がほとんどである。田を手放したり、請け負わせているのだから当然である。子供は働き手などという考えは、彼らの親も祖父母も抱いてはいない。農業についても周りからすることを期待されていないというよりもむしろ、先が不安な農業で生計を立ててほしくないと思っているようだ。大人の本心は子供に将来杉野屋に残って、実家から通勤してほしいと願ってはいるようだが、実際は子供たちの意思に任せている人が多い。高校を出ると大学などに進学する者は、ほとんど杉野屋を離れている。子供自身は幅の広い選択肢の中から自由に選択できる環境の中で育てられ、自分の道を自分で選択している。また親や祖父母も子供たち自身も家を継ぐものだと考えてはいないであろう。遊ぶ場所も遊び方も変わった。プールは学校へ行き、今はもうお寺で遊ぶものはいない。家でテレビゲームをしたり、サッカーや野球など道具を使って遊んでいる。つりをするのも親や祖父母の時代は上級生と行ったが、今は親と行く子もいる。

2. 子供とかかわる施設

現在の子供の祖父母が子供のころには、まだ乳幼児を預ける施設は存在していなかった。お寺で農繁期の時期だけ預かってもらうというようなことはあったが、組織だったものではなかった。今の杉野屋の集落センターのあるところに保育所が出来たのは1954年である。保育所ができたのは住民の要望があったからだという。それまでは杉野屋で農業をしていた、もしくは集落内で店を出すなど副業をしていた大人たちの仕事が、次第に杉野屋から離れた場所へ通勤するといった形へと移っていく。また女性もパートなどで家にいることが少なくなった。そのため日中は親元を離れ、保育所で生活する乳幼児が増えた。

小学校に関しては1974年に子浦に新しくできた志雄小学校に統合されるまでは、杉野屋、菅原、二口を校区とする南邑知小学校へ子供たちは通っていた。南邑知小学校は杉野屋と菅原の境で、現在の「子どもの家」がある所に建っていた。子供たちが歩いて通える距離であった。学校が近かったので遊び場には当然学校も含まれていた。

志雄小学校は旧志雄、散田、針山、向瀬、南邑知小学校の5校が合併してできた小学校である。現在の子供の親の世代は、小学校が移転する前後に入学時期を迎えた。移転した後は、そ

れまでは他校区であった地域から来た友達もでき、何もかも新しかった。杉野屋から志雄小学校へ通う児童には定期が発行され、バス通学へと通学手段も変わった。子供たちは生活の半分を杉野屋から離れた子浦で過ごすこととなる。杉野屋で昼間に子供の声を聞くことは少なくなった。

今や朝の子供たちのバス通学の光景は日常的なものとなった。バス停でバスを待っているわずかな時間のおしゃべりが、杉野屋の子供同士で情報を交換する場となっている。学校についてしまえば杉野屋以外の集落に住む友達がいて、集落内の話題よりも他の地区と共通の話題を選ぶ。家庭での時間を除けば、普段子供たちが杉野屋という地域にかかわる時間はごくわずかである。

夏休みなど長期的な休みになると、学校がない分必然的に家にいる時間が多くなる。家にいるということは杉野屋にいる時間も長いということだ。そんな夏休みを利用して普段より近所の子達と遊び、お互いの家を行き来することが多いと言う親もいた。

学習要領の内容が改訂され、志雄小学校でも授業の内容が変わりつつある。地元の民謡である「みつさ音頭」を総合学習の時間に学び、ふるさとを子供たち自身が体験するというような授業が、志雄小学校だけでなく全国的に試みられている。中学校でも美術部では志雄町の民話を生徒が版面にしている。これは役場のホームページにも載っており、カレンダーにもなって住民に好評を得ているようだ。調査で訪れた家にもそのカレンダーが飾られていた。

このような学校側の取り組みでは、当然ふるさとといえば志雄町全体を指す。杉野屋や菅原といった集落レベルの視点は、校区の拡大によって子供たちの世界が広がったことにより、薄れてきた。ふるさと体験のような学習は学校や市町村が取り組んでいることである。つまり大人の、子供にもっと自分の住んでいる世界を見てほしいという思いが込められている。外に目を向けるようになった子供たちに、内側にも目を向けることを勧めている。

だが杉野屋や志雄町といった地域的な視点とともに、日本を越えて世界に目を向けさせることも試みられている。志雄中学校では3年前から毎年生徒をフィンランドに青少年海外研修として派遣している。杉野屋の子供もこの研修を通じて海外へ行くようになった。研修後の彼らの感想には「日本」という言葉が頻繁に見られた（「広報しお」2000～2002年の10月号）。

視野が海外にまで広がることで、子供たちは市町村や都道府県などの境界を超越し、一国の国民としての自分の立場を認識するようになった。彼らの祖父母の時代には、外国に直接出かけていくどころか、マスコミなどによる外からの情報も乏しく、外に目を向ける機会も少なかった。外の世界に関心が無かったという人もいた。しかし親の世代は外の世界からの情報が豊かになり、それとの関わり方も様々に分かれた。それをライフコースの選択という観点から大別すれば、それでも杉野屋に残って家を継ぐものだと考えた者と、杉野屋の地を離れること

を選んだものである。現在の子供は情報をいつでも自由に得ることができ、外からの情報よりも逆に、集落などの身近な内部社会の情報が乏しい環境におかれている。よって外の世界に関心を持ちやすい。そこで今、内部の社会に目を向けさせようということが頻繁に試みられているのだ。

Ⅲ. 杉野屋での子供を対象とした組織と活動

次に杉野屋という地区での子供たちの様子をみていく。杉野屋の子供たち同士が接する機会は意外と少ない。近くに住んでいながら、クラブや塾などに忙しい毎日を送ってればお互い会う暇も無いかもしれない。そんな彼らにとって子供会のような地区組織は杉野屋と関わる数少ない機会である。そんな子供会の様子をみていく。また後半は地域の祭りでの子供たちの様子を取り上げる。

1. 子供会

杉野屋の周辺では子供会は戦後の自主学習への動きと、教育は学校だけでなく地域の協力をも必要とするという考えにより、1948年から1956年までの間に次々に誕生したもののようである。現在の子どもの祖父母の時代は子供会はなかったか、もしくはあっても名前だけの存在だった可能性がある。しかし日曜学校があった。日曜学校は光照寺で開かれていた。住職のお話を聞くのであるが、子供たちは行くとお菓子がもらえたので楽しみにして友達を誘って行っていたようである。

親の世代になると子供会の存在は記憶に残っているが、活動の内容はあまり覚えていない。自主学習という新たな概念の中で戦後新たに誕生したものであり、住民たちも何をすればいいのか理解できていなかったという。実際の活動は小中学校の入学、卒業を控えて行われる歓送迎会くらいのものであったようだ。

小学校の移転や習い事やクラブなどで杉野屋から子供たちの日常生活が離れるにしたがって、子供会の活動はむしろ活発になってきたといえる。現在は親の世代と比べると活動回数も増え、内容も変化している。

現在の主な活動は表1にあるように、教育よりも子供が楽しむことに重点をおいているようだ。親子バス旅行では日帰り体験できる施設などに行く。集団生活では1泊2日で、自炊を体験し、花火大会や海水浴等をして楽しむ。クリスマス会ではケーキにデコレーションをしてクリスマスの雰囲気を楽しむ、家に持って帰り家族と一緒に食べるそうだ。歓送迎会では4、

5年生が中心となり子供たちが考えたゲームを行う。冬以外はバス停の掃除も毎週交代で行っている。最近では新たに将棋大会も開かれるようになった。青年団や壮年団などの地区組織と比べ、子供会の活動は衰退するどころか新たな行事まで誕生している。先ほども述べたように親の世代のころは歓送迎会くらいのものであったが、今はほとんど毎月行事が行われるようになった。他にも分館主催のグランドゴルフ大会や地区運動会などに青年団や老人会などと共催で参加している。

表1 杉野屋子供会の主な年中行事

月	活動内容	対象学年
6	親子バス旅行	全学年
7	集団生活体験	4、5、6年
7、8	ラジオ体操	全学年
9	秋祭り、子供神輿	全学年、保育園児
12	クリスマス会	全学年
3	歓送迎会	全学年、新入生
4～12	日曜日に交代でバス停と大宮の掃除	4、5、6年

だがこれらの行事を子供たちだけで行うことは難しい。子供会とは言えど、当然親の手助けが必要となってくる。役員となった親は仕事を休まなければならないときもあるという。行事を企画して、実際に運営するのはやはり保護者でもあり、子供会は子供だけでなく、保護者でもあるように感じられた。中学生になると子供会と似た活動があるとはいえ、実際の活動は年に1回の空き缶拾いやボーリング大会にとどまっており、子供たち自身、部活動などで全員は参加しておらず、また参加するのを面倒に感じているというのが現実のようだ。また中学生にもなると保護者も役員以外は参加しないようだ。子供会でもやはり学年が上がるにつれ同じ傾向がみられるが、低学年の子供たちは楽しんでいるようだ。

2. 祭り

杉野屋で行われる祭りは決して有名でも、大きな祭りでもないが、特に秋祭りは昔も今も、子供たちにとっても大人にとっても、魅力的なものであることに変わりはないようだ。だが祭りの様子や、祭りへの子供たちの関わり方は変わってきている。

祖父母の世代には秋祭りに子供が何らかの役割をもって参加することはなかった。だが今よ

りも祭りが賑やかで、出店の数もはるかに多かったため、いろんなものを買いにいくのが楽しみだった。わずかなおこずかいをもらい、出店へ向かったり、獅子舞の後ろをついて集落を廻った。天狗は子供たちの憧れで将来自分も天狗をしてみたいと思ったそうだ。子供が役割をもって参加する祭りは花祭があった。花祭とは4月8日の釈迦の誕生日を祝う行事である。灌仏会や仏生会などとも呼ばれる。お寺の参詣者は誕生仏の像に甘茶をかける。釈迦は生まれる前に天上界から下界に降りてくるとき、白い象に乗ってきたと考えられているために、子供たちは歌を歌って白い象を引っ張って集落を廻る。今の子供御輿といったところだろう。当時のことを覚えている人は、今もその歌を思い出すことができる。また子供が中心となっていく行事として左義長があった。今は学校で行われているが、かつては子供たちが山で竹を取ってきて田で焼いていた。大きな竹を取るため互いに競って山へ行ったという。両脇には大きな火を燃やすために柴を乾燥させたものを置いた。柴刈りは夏休みに行き、山などに干しておいた。

親の世代でもまだ秋祭りは子供が役割をもって参加するものではなかった。だが獅子舞の後ろにくっついていたり、天狗への憧れは祖父母の世代と変わりはない。花祭はもうなくなっていたようだ。

1983年、子供御輿が新たに始められた。秋祭りに子供たちが積極的に参加できるようにと、住民が御輿を寄付したのが始まりだ。以下には2002年の秋祭りでの子供たちの活動を、観察をもとに記述する。

祭り当日、子供たちは学校を早退し、お昼過ぎに集落センターに集まる。その日は夕方まで杉野屋の集落内を御輿を引いて一周する。笛を吹き、はっぴを着て、青年団と同じようにもらった寄付（「ハナ」と呼ばれる）の御礼を読み上げる。華やかとは決していえないが、子供たちの声が聞こえてくると住民は外にでてきて、子供たちの様子をほほえましく見ていた。この間青年団の獅子舞は子供御輿とは別々に集落を廻っており、子供たちはその様子を見ることは出来ない。そのせいか大人に連れられて見に来ていた小さな子以外は、獅子舞の後ろをついていく子供の姿は見られなかった。杉野屋を一周した子供たちは大宮に戻り、記念撮影をし、片づけをして解散となる。この子供御輿は神道的な意味はなく、単なる子供会の行事の1つにすぎない。しかし、地域の子供同士の交流の場でもあり、杉野屋の子供という自覚を与えるものだという人もいるように、子供たちは普段と違った祭りの雰囲気や漂う集落を別の視点で見ることができたのではないだろうか。実際に子供たちが一緒に集落を一周することなど、このような機会にしかないだろう。子供に杉野屋という地区を知らせるにはいい機会だったに違いない。

秋祭りのクライマックス、宮上がりが近づくと、大宮の周りには悪天候にかかわらず大勢の人だかりができていた。今まで調査してきて杉野屋であれほど多くの若者の姿を見たのは初めてだった。それまでは家の中にいた子供も、夜遅い時間ではあったが、父親に肩車をしてもら

いながら、小さな目をパッチリと開けていた。高校生は制服のまま見に来ていた。他の集落から友達まで連れて見に来ている子供もいた。女子高校生に祭りは楽しいかと聞くと「楽しい。祭りは好きだし、獅子舞はカッコいい。出来れば自分もやってみたい」と答えてくれた。小学生にも聞いてみると、「祭りは好き、楽しい」という答えが返ってきた。では中高生に地元に残りたいかと聞くと、小さな声で分からないと答えた。祭りは祭りであり、将来獅子舞や天狗をやってみたいという気持ちと、杉野屋に残りたいという気持ちは直接は結びつかないものだった。

子供と祭りの関係においての最も大きな変化は、2002年に初めて獅子舞のはやしの笛吹きとして、中学生が参加するようになったことである。中学校で吹奏楽部に入っているということで頼まれた中学生は女の子たちだった。女はそれまで陰で祭りを支えるもので、決して表舞台には出てこなかった。青年団の人数不足のため後継者がいないという理由で昨年抜擢された彼女たちだが、そのうちの1人は来年もしたいと思っており、男の輪の中に入れることがうれしいと言っていたという。また男に生まれればよかったとも言っていた彼女の言葉は、祭りがやはり男の世界であることを彼女自身理解していることを示している。だがその概念を打ち破るのは彼女たちかもしれない。

IV. 考察

「子供が元気がない」と感じる人や、実際以上に「子供が減ってきている」と感じる人がいるのは、そう感じる人の子供時代と今の子供たちの生活も環境も違ってきているからである。小学校が遠くになり、塾や部活動に忙しい彼らは日常生活の多くの部分を杉野屋以外の地で過ごすようになったのである。祖父母や親の世代では今よりも日常生活の多くの部分が杉野屋で行われていた。今では杉野屋の外の社会が子供たちの日常となり、子供会や祭りのような地域に関わることのほうが非日常的なものになってきている。

今、子供たちは様々な情報を簡単に手に入れることが出来るようになり、子供たちの視野は世界にまで広がっている。子供たちの世界の広がりを目の当たりにした大人たちがとった行動は、子供たちの目を地域社会の内側へ向けようとする事だった。学校のふるさと体験学習も子供会も祭りも、外へと広がる子供たちを地域に結びつけようとして大人たちが考えたものだ。しかしそのような大人も、子供たちが将来地元に残ってくれるとは考えてはいない。近い未来、生まれ育った地を離れていく彼らに少しでもふるさとを残しておきたいと願っているのだ。